

---

# 三題噺 「雪」「純白」「電話」

ウリミッツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三題噺 「雪」「純白」「電話」

### 【Nコード】

N4977P

### 【作者名】

ウリミッツ

### 【あらすじ】

「雪」「純白」「電話」の三題噺です。

短いので気軽に読んでやってください。

めでたく社会人一年生として出発したのが今年の四月。

それからは、初夏のまばゆい緑も見ず、風鈴の音も聞かず、突き抜ける青い空やいわし雲も見ることなく、ひたすら季節も色気もないオフィスという箱の中で、俺は時間に追われ続けた。

いつの間にか、「俺」は「俺」ではなくなっていた。

そんなある日、夜中に電話が鳴ったのだ。かかってきたその電話は、まるで異世界からの電話のように感じられた。

「おーうい、修二！ ひつさしぶりい。どうよあ？ 調子はあ」

やたらと雑音の多い中から聞こえる懐かしいダミ声を聴いて、思考が止まる。そのまま何も言えずにいると、

「はあれえー？ もしもーし、どちたのー？ しゅっつうじくーん！」

地元の酔っ払いどもが居酒屋でバカ騒ぎをしている。ただそれだけの電話に、俺はどう対処していいのかわからなかった。

「ああ・・・ワリい・・・」

そっういえば、最近ずっとタメぐちなんて使っていないかった。意識しないと、誰に対しても敬語が出てきてしまいそうになる。

気付き、独りで苦笑し、暗い部屋で額に手を当てた。

大した内容もない会話。田舎を思い出して、仲間を思い出して、酔っ払い相手にバカ話をする。こんなたわいもないことで、ここまですぐ救われるとは。

「正月には帰るよ、うん。そっちにいたときは雪なんて見たくもなかったけどな。今はなんか、それも・・・」

「がっはは！ 雪が見たいだなんておセンチねっ！ 俺はチエちゃんのパンツのほうが・・・おほっ！ 純白っ！」

受話器の向こうで悲鳴と歓声上がる。

まったく、バカ野郎。笑っちゃまったじゃねえか。

正月に帰ったら、ああ、また、こんなバカ話をしようか。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4977p/>

---

三題噺 「雪」「純白」「電話」

2010年12月14日21時45分発行